

シユーマツハーの

読みかた

グローバル地域研究所

小松光一

■ スモールイズ

ビューティフル

このところ、E・F・シユーマツハー(注1)の「スモールイズビューティフル」の勉強会をやっている。あの小島慶三さんの訳で、日本でも一時ひとつのブームをおこした本だ。(注2)

私も、実は昔読んでざりて、あまりにも、表題のスモール・イズ・ビューティフルがつよすぎて、そうした印象だけが強いだけだったが、いま、つまり一九九五年の世紀末に読みかえてみて、実に深いものがあることに驚いている。訳者の小島慶三さんも書いているが、ともすれば「中世紀的な牧歌的ユートピアを夢見る者」と理解してはいけないのだ。

シユーマツハーは、もともと、この書名を「ふるさと派」としたかったらしいが、編集者が「スモール」に目をつけたのだ、という「ふるさと派」の「ふるさと」は、ホーム・カウズと「ふるさと」の「ふるさと」は、ホームとほす

ばらしい」ということなのだ。

しかも、一九七三年にヨーロッパで出版され、一九七六年には『人間復興の経済』として訳出され、(注3)いかにも一九七〇年代、つまり、二〇年前のテキストのように思われがちだが、シユーマツハーはまぎれもなく二一世紀の次の時代のために書いたのである。

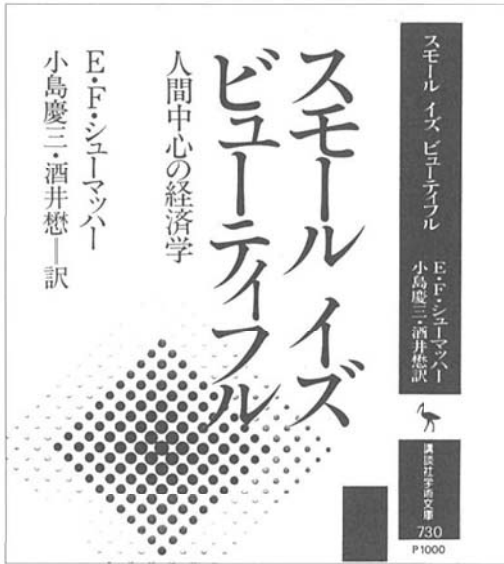
だから、世紀末の現在こそ、シユーマツハーは読まれなければならないと思う。

■ 正しい土地利用

先日の勉強会は、第二部 資源・第二章 「正しい土地利用」をやった。

この「資源」をとりあつた部分の第一章は「教育」であった。つまり、資源の第一義は人間であり、第二義は土地の利用への考えかたなのである。

シユーマツハーは、「文明人は地球の表面を渡つてすすみ、その足跡に荒野を遺して行つた」という言葉を引用しつつ、「歴史の著述家たちは土地利用の重要性について



注1)エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハー
(Ernst Friedrich Schumacher)
1911年ボン生まれの経済学者。オックスフォード大学に学ぶ。第2次大戦後イギリスに帰化。英国石炭公社顧問として早くから石油危機を予言。その「スモール」の経済学は、物質至上主義の現代文明へのもっとも鋭い批判として注目されている。1977年没。

注2)「スモール・イズ・ビューティフル」
講談社学術文庫 (定価：1,000円)
1986年4月10日 第1刷発行
1994年9月14日 第14刷発行



は全然注目しなかった」と記す。つまり、近代は、結局、土地という資源を「科学」という名で、浪費しつつくすくすしか考えてこなかったということなのだ。

■飯沼 二郎

わたくしは、この数年北海道の農家とつきあうようになって、飯沼二郎さんの書に注意して読むようになった。(注4)

たまたま、いまNHKフツフスの『日本農業の再発見』を読みなおしている。

飯沼さんが、宮崎安貞の『農業全書』の最初のことば「農人たるものは、わが身上の分限をよくはかりて、田畑をつくるべし。おのおの、その分限より内ばなるをもつてよしとし」は、明の徐光啓の『農政全書』からの引用だし、この農政全書は、古代中国の『齊民要術』からの引用だと書いてあるところに魅かれた。(注5)

実は、わたくしは、この四月より帯広市が主催する『おびひろ農業塾』の塾長(塾頭は帯広市長)

をつとめることになり、塾のなかの新規就農希望者(変な言い方だなあ…)むけの課程「十勝ふるさと農学校」の開校式で、「土地のキャパシティを超える農業は成立しない。おそらく北海道の酪農は、土地のキャパシティを無視して、規模を拡大しすぎたのではないか」と講義をして、帯広市の農林課長三上博さんにたしなめられたことがあった。

彼は、「個人の農地だけでなく育成牧場も含めながら、北海道酪農は土地との結びつきをちゃんとやろうとしているのではないか」と、私に教えてくれたのだ。…。シューマッハーは、「土地を、土地とその上に住む生物」と、とらえようとする。

つまり、土地のキャパシティは、土地面積の広さだけではなく、耕土、そのなかに住む微生物、それから耕土の上に育ち・生きるたぐさんの生物たちの総体としての「土地」ということなのだ。

事実、一九七〇年代半ば以降、ヨーロッパの農政は、近代主義的なマンズホルト・プラン。(注6)

注3)「人間復興の経済」
スモール・イズ・ビューティフルは1973年の出版以来、世界中で翻訳され、わが国では、1976年佑学社から「人間復興の経済」の書名で斎藤志郎の訳で上梓され第5刷に及んでいる。

注4)飯沼 二郎
1977(大正7)年生まれ。京都大学名誉教授。農業経済学、朝鮮近代史専門。

注5)「日本農業全書」
1697(元禄10)年発刊の、わが国最初の農法書。「農政全書」(1630年)「齊民要術」(せいみんようじゆつ、532~545年)は、ともに中国農法書。

注6)マンスホルト・プラン
1970年、ヨーロッパ経済共同体副委員長だったシッコ・マンスホルト博士が、ヨーロッパ農業のためのプランを実行に移した。博士によれば、農民は、「いまだに社会の急激な変化を理解しない階層」であり、「農民の大部分は農業を捨てて都市の労働者になるべき」とし、マンスホルト・プランでは、できるだけ早く小規模な家族経営農家を集約して工場のように経営できる大規模農家を作り、農業人口を最小限に減らすことを目標とし、「老若の農民の離農を助ける」ために助成金が用意された。

に変えて、シユーマツハーの弟子たちによって『緑のヨーロッパ』という政策に転じていく。
さて、日本は？ 北海道は？
ということになる。
おそらく、日本も北海道も、未だ「土地利用」について配慮した抜本的な「政策」がとられていないにちがいない。

■ 21世紀のふるさと派

少々荒っぽくいえば、一村一品運動の多くは、差異とデザインに吸収され、制度の側に統合されていった。

本来なら一村一品は、その村の自然のキャパシティと文化アイデンティティにもとづく、哲学的な(人間復興の)問題提起だったのだろうと思うが、結局、シユーマツハーの議論とかがみあうことなく、単なる、モノ商品論のレベルでもしろくもなんとなくなってしまうた。

おそらく、グリーンツーリズムやファームインなどといわれるものも、安手のデザイン論(コンサ

ルタントなどががんばってしまつた)におちいらない「土地利用の方法」をよく考えたものにしなければならぬだろう。

二十一世紀はすぐそこに来ている。



小松 光一(こまつ こういち)さん

1943年北海道上砂川町生まれ。
ながく千葉県における農業後継者教育にたずさわったのち退職。藤田和芳氏、立松和平氏らと「アジア農民元気大学」を設立し、アジアの農民のネットワークをめざす。
北海道においては、常呂町「風のがっこう」学長、帯広市「おびひろ農業塾」塾長の役を果たす。
近著・『山間地農村の産直革命—山形村と大地を守る会との出会い』(農文協・刊)
現在、お茶の水女子大学、法政大学、茨城大学の非常勤講師。